

ブロードウェイ♪ブロードウェイ コーラスラインにかける夢

2008(平成20)年9月12日鑑賞<松竹試写室>

★★★★



監督・製作＝ジェイムズ・D・スターン、アダム・デル・デオ／出演＝『コーラスライン』
オリジナルキャスト&スタッフ／マイケル・ベネット（松竹、ショウゲート配給／2008年ア
メリカ映画／93分）

……あのミュージカルの最高峰『コーラスライン』再演版が大ヒット！ それだけでも大事件だが、そのオーディション風景をドキュメンタリー映画として売り出すとは！ 日本では競争の否定と格差社会への不満でいっぱいだが、自由競争の国アメリカでは？ そして、ブロードウェイでは？ そこは競争、競争、また競争の世界だが、人間の感動の源泉は……？

これぞミュージカルの最高峰！

ミュージカル大好き人間の私は、日本では劇団四季をメインとしてたくさんのミュージカルを観ているが、本場ブロードウェイのミュージカルは観たことがない。唯一外国で観たのは、1988年のヨーロッパ旅行の際、オランダの劇場で観た『CATS』だけ。もちろん日本語の字幕はないが、『CATS』は複雑なストーリーがないから、言葉がわからなくても十分楽しむことができた。

その『CATS』に抜かれるまで最長のロングラン記録を誇っていたブロードウェイミュージカルが、1975年に初演された『コーラスライン』。1976年のトニー賞で最優秀ミュージカル賞をはじめ9部門を受賞したのがこのミュージカルの最高峰『コーラスライン』だ。

そのミュージカルが映画化されたのがマイケル・ダグラス主演の『コーラスライン』。これは1985年の製作だが、1983年の『フラッシュダンス』と共に、私は何度も何度もビデオで観たものだ。

あの感動をもう1度！

そんな感動的なミュージカル『コーラスライン』の再演版がジェラルド・ショーンヘルド劇場で初演されたのは2006年10月5日。この再演版は、わずか19週で800万ドルの投資金額すべてを取り戻したとのことだ。それはそれですごいことだが、アメリカのショービジネス界における商売カンのしたたかさはもっとすごい。

なぜなら、再演版ミュージカルの大ヒットを予想したスタッフたちは、再演版のためのオーディション風景をドキュメンタリー映画にして、ひと儲けしようと企んだのだから。

そんな儲け話にまんまと乗ってしまう日本人は甘いと言われても仕方ないが、そう言われても、やっぱりいいものはいい。私が映画で観た約20年前の『コーラスライン』の感動を、今スクリーンでもう1度……。

競争、競争、また競争！

日本では今、プロレタリア文学の金字塔である小林多喜二の『蟹工船』が大ブーム。これはニート、フリーターを含む低賃金、長時間労働に苦しむ若者たちが、その不平不満を社会や国家に向け始めたため……？

他方、現在5氏の立候補によって華々しく展開されている自民党総裁選挙の争点の1つが、小泉改革の承継の是非。つまり、小泉改革の負の側面とされる拡大した格差の是正が必要、との声が日に日に強くなっているわけだ。

競争を悪とするケツタイな日本の価値観は、運動会における1等賞、2等賞、3等賞を廃止したことに顕著だが、ホントにそれでいいの……？ 北京オリンピックにおける中国の金メダル獲得のためのすさまじい努力を見ていると、私はそう痛感。そしてそれを、この『ブロードウェイ♪ブロードウェイ コーラスラインにかける夢』を観てさらに痛感！ まさにこの映画を観れば、自分の夢を実現させるためには競争、競争、また競争！ が当たり前がよくわかる。何でも平等にとの考え方にもとづく競争否定の日本の価値観は、大きく軌道修正していかなければ……。

映画誕生の2つの要因は？

この映画は、私には懐かしい1970年代のオープンリール方式の録音テープの声か



All Rights Reserved © Vienna Waits Productions LLC.

ら始まる。これは、今から30年以上前の1974年に、ミュージカル『コーラスライン』のオリジナル版の原案・振付・演出をしたマイケル・ベネットが、ダンサーたちの「打ち明け話」を録音したもの。『コーラスライン』の企画はすべてここから始まったわけだ。オリジナル版において、ダンサーたち1人1人が告白する身の上話の原点はすべてこの録音テープの中にある。その録音テープの公開をマイケル・ベネットの遺言管財人が許可したことが、この映画誕生の第1の要因だ。

第2の要因は、オーディション風景の撮影とその公開を、オーディション主催者と参加者たちが許諾してくれたこと。オーディション風景をそのままドキュメンタリー映画にするという企画は面白そうだが、そこには生の人間の生の姿が映し出されるため、とりわけ落第者はイヤなもの。しかし、私がかつてよく観ていたテレビ番組『ASAYAN』の例を見ても、オーディション風景を観るのは、くだらないテレビドラマを観るよりよほど面白い。それは、つくりものではない人間の必死さや真剣勝負の姿を観ることができるから。この2つの要因によってこの映画が完成したわけだから、私たちはこの2つの「許可」に感謝しなければ。

それにしても、“モーニング娘。”の人気が今なお続いていれば、『ASAYAN』のオーディション風景をドキュメンタリー映画としてまとめたら大ヒットするはずだが、ミュージカル『コーラスライン』再演版が大ヒットしているのとは異なり、“モーニング娘。”はもはや過去の人……？ したがって、どんなチーム再編をしても、どんな起爆剤を投入しても再ヒットは到底ムリ……？

コニー役とキャシー役に注目！

オーディションで選ぶのは、再演版のミュージカル『コーラスライン』の出演者19名全員。もちろん、この1人1人に人間ドラマがあるうえ、その役の獲得に向けてオーディションに臨むダンサーたち1人1人の人生がある。したがって、ホントはここでそれを1人1人紹介したいのだが、それは到底ムリなので、ここではコニー役とキャシー役の2人だけに注目したい。なぜなら、それは第1に、オーディションの審査員として、①オリジナル版の共同振付を担当し、再演版の演出を手がけたボブ・エイヴィアンの他、②オリジナル版のキャシー役のドナ・マケクニーと③オリジナル版のコニー役のバイヨーク・リーの2人が登場しているため。そのため、キャシーとコニーのオーディション風景とその選出過程はより興味深く楽しめるはずだ。

第2に、コニー役に注目するのは沖縄出身の日本人高良結香がチャレンジしているため。そしてキャシー役に注目するのは、ソロのダンスをはじめとしてキャシー役は他のダンサーたちの一歩先をいく特殊な役柄だから。

注目その1 コニー役は？

オリジナル版でコニーを演じたバイヨーク・リーは、中国人の父とインド人の母の間に、マンハッタンのチャイナタウンで生まれた女性。彼女は『コーラスライン』に1番深く関わった人物で、現在も振付家、プロデューサーとして活躍しているとのことだが、この映画の中で彼女が模範として見せるダンスや、ダンスの指導ぶりをみると、その迫力にビックリ！

そんなコニー役の最終審査に残ったのは、前述の高良結香とJ・エレーン・マルコス の2人。全くイメージの違う2人だが、さて最終合格者となったのは……？



All Rights Reserved © Vienna Waits Productions LLC.

注目その2 キャシー役は？

映画『コーラスライン』では、マイケル・ダグラス演ずるザックが、壇上に立つダンサー1人1人に向かって「履歴書に書いてないことを話してもらおう。君たちがどんな人間なのか」と話しかけるシーンが印象的だった。そんなザックが、演出家としての立場と元恋人という立場で混乱することになったのは、キャシーがオーディションに出場してきたため。「赤裸々に自分を語ってくれ」とザックが要求したとおり、キャシーは自分の過去を詳しく語り始めるのだが……。

キャシー役は、ダンサーとして頂点とどん底を体験したうえで、今は「仕事がほしい」と心から叫んでいる難しい役であるうえ、キャシーのソロのダンスはオリジナル版でキャシー役を務めたドナ・マケクニーの天才的ダンス能力を前提として成り立ったものだから、その役への挑戦は大変。最終審査に残ったのはシャーロット・ダンボワーズやナターシャ・ディアスら4人だが、さてその結果は……？



All Rights Reserved © Vienna Waits Productions LLC.

感動の源泉は？

2008年8月8日に始まった北京オリンピックや現在開催中の北京パラリンピックを見ればわかるように、人間が感動するのは結果以上に選手たちが努力しているその姿。そのためにはルールは「シンプル イズ ベスト」で、いろいろとややこしい“縛り”をかけると感動が薄れるだけ。ちなみに、司法試験だって私が合格した1972年は合格者500名の時代だったが、今のように受験回数制度などは何もなく、要するに努力した者が合格するというシンプルなものだった。オリンピック競技も司法試験もその合否を決め、順位をつけるのは容易。しかし、ダンサーのオーディションはどうしても審査員の主観が入ってしまうが、それはある程度やむをえない。しかし、これだけオープンに審査が行われれば、その結論に異議を唱える応募者はいないはずだ。

ちなみに大阪府では今、府下各市の教育委員会の全国学力テストの市町村別結果公表の是非をめぐる、橋下徹大阪府知事と各市町村教育委員会との間で大バトルが展開されている。これは成績の公表は競争を激化させるからダメだという教育委員会の価値観を前提としたものだが、私が腹が立つのはそんな教育委員会の姿勢。「そんなことだから、日本の教育はダメになったんだ！」「この映画を観て競争のすばらしさと、そこから生まれる感動をしっかり味わえ！」と私は声を大にして叫びたい。

2008(平成20)年9月17日記